



9月5日、東京2020パラリンピックが閉幕しました。今大会には、小野上地区出身の唐澤剣也選手が初出場を果たし、陸上男子5000m(T11)で見事銀メダルを獲得しました。

唐澤選手は、小学4年生の時に病気で視力を失い、小野上小学校から県立盲学校に転校しました。卒業後は県立点



▶市役所にメダル獲得を祝うポスターを掲示

字図書館の職員となり、フルタイムで働きながら陸上の練習を重ねてきました。

唐澤選手には、小野上地区の元旦マラソンや市役所などで何度もお会いしましたが、とても真面目で礼儀正しく、親しみやすい人柄です。以前、唐澤選手に「視覚に障害のある人として社会に何を望みますか」と質問すると、即座に「人々の声掛けです」という答えが返ってきました。その答えに、段差解消などのハードよりも、「心のバリアフリー」の方が大切なのだと気付かされました。今、渋川市は「共生社会実現のまち」を進めています。「多様性と調和」が東京2020大会のコンセプトの1つでした。そして、「失ったものを数えるな。残された機能を最大限に生かそう」というパラリンピックの理念、また、国際パラリンピック委員会のアンドリュース・パーソンズ会長の「違いは強みであつて弱みではない」という言葉が、唐澤選手の望む「心のバリアフリー」なのだと思えて思いました。

「全ての違いが輝く街」を目指して、パラリンピックの感動を一過性に終わらせず、「壁のない社会を実現し、多様性を認め、支え合う共生社会を根付かせていきたいものです。